

小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン

第4回 「社会科授業での共有化」

社会科授業における「共有化」とは「一人の子どもの『社会的見方・考え方』のよさを全員に広めること」と村田氏は述べている（2013年『社会科授業のユニバーサルデザイン』より。「社会的見方・考え方」については、本連載第2回を参照）。

共有化するということは、子どもたち相互のやりとりになる。理解のゆっくりした子は、他の子の考えを聴きながら理解を進め、理解の早い子は、他の子へ考えを伝えることでより深い理解につながる。

目的を意識して共有化をしていけばよいが、「共有化＝無目的にペアで話し合わせる」というように、形式的な共有化になっている場面も多く見られる。

共有化で考えなければいけないのは、「どこで」「何を」「どのように」共有化させるかということである。

以下のような表にまとめてみた。

どこで	何を	どのように
○授業の山場	○クラス全員に広めたい「社会的見方・考え方」 ○ねらいにせまるような、価値づけるべき発言	○ペアで・グループで ○再現させる ○途中から考えさせる ○ヒントを出させる

一人の子どもの「社会的見方・考え方」のよさを全員に広める＝共有化するために、「共有化」を大きく二つに分けて、段階的に考えてみることを提案する。

一つを「ライトな共有化」、もう一つを「コアな（本質的な）共有化」とする。

当然、「コアな共有化」をさせることが本筋であるが、いきなりそのようにできるものではない。まずは「コアな共有化」をさせる前段階として、「ライトな共有化」から考えたい。

◆「ライトな共有化」

子どもたち同士が交流することもなく授業が終わってしまった。教師と子どもたちとの一問一答のみで授業が終わってしまった。

このような授業に出合ったことはないだろうか。

そもそも、共有化することに慣れていない子どもたちは、お互いの考えを共有しようと思わないのではないだろうか。また、共有化の仕方も分からない。

まずは、共有化をしようと思う個々の気持ちを高めることと、雰囲気作りが必要である。そして、共有化することに子どもたちが慣れていくことが大切である。

「自分の書いたことを隣の子と確認する」「頭に思い浮かんだことをペアで伝え合う」など、簡単なことから始めればよい。最初はぎこちないかもしれないが、慣れると自然にで

きるようになってくる。要は、回数多くペアで話をさせることだ。「短時間×多回数」で、まずはペアで対話することを「当たり前」にしていくのである。話して交流することで、お互いのかかわりも増え、人間関係もよくなるだろう。

「1授業のうち5回はペアで交流する機会を設けよう」など、自分の中で目標を決めて授業に臨むのもよい。

以上は、「コアな共有化」につながる共有化であると言えよう。本質的な共有化をするための土台づくりでもある。

◆「コアな（本質的な）共有化」

さて、ここからが本番である。先に挙げた表の内容を具体的に述べていく。

〈どこで〉

「本質」とは何であろうか。その教科でねらいとしている、ど真ん中の部分である。例えば社会科では、「公民としての資質・能力の育成」（社会認識ができた上で合理的に判断し、行動できる態度や能力）を獲得することである。そのために「社会的見方・考え方」を獲得させなければいけない。そこを外しては、社会科における本質的な授業は成り立たない。そう考えれば、共有化させるべき場所は、教科の本質につながる「ねらい」が最も凝縮されている場所になる。つまり、授業の「山場」の部分である。「コアな共有化」は、授業の「山場」でなされるべきである。

〈何を〉

何を共有化させるのか。それは、クラス全員に広めたい「社会的見方・考え方」であり、本時のねらいにせまるような、価値づけるべき発言である。

例えば、自然条件に特色のある地域の学習でいうと、「野辺山原と白根郷は、土地の高さという点では違うけれど、どちらもその土地の自然を生かして工夫して生活しているという点では同じだね」や、「家の屋根を急斜面にしたり、信号を縦向きにしたりするなど、雪国の人々は多くの雪に備えて様々な工夫をしているんだね」などといった発言である。

〈どのように〉

方法はたくさんある。先の表に書いたように「ペアやグループで話し合う」「ある子が言ったことを別の子に再現させる」「ある子の発言を途中で止めて、続きを周りの子に考えさせる」「ヒントを出しながら周りに広げていく」などが考えられる。

ここでは、教師の少しの心構えやはたらきかけがポイントとなる。

「〇〇さんが言ったことをもう一度言える人？」と、一人の発言を全体に意識させること。

「今、〇〇さんが△△と言った意味がわかりますか？」と、一人の発言の意図を読み取らせ、解釈させようとする。

「〇〇さんがとても大切なことを言ってくれましたよね。〇〇さんの発言の大切な部分を、隣の人と伝え合いましょう」と、一人の発言をしっかりと理解できているか確認させること。

「今、〇〇さんが『～だけど』と言いましたが、〇〇さんがその続きにどんなことを言おうとしているか予想できる人？」と、一人の発言から全員に思考させること。

その時の子どもたちの状況や、子どもたちの実態によっても方法は変わってくる。「目の前の子どもに合わせて」とはそういう意味である。

また、友だちの意見を解釈し、共有しようと思えば、その意見をよく聴かなければいけない。そうすることで、聴き合える学級集団にもなってくる。

最後は、共有化が図れたかどうかを確かめるために「一人ひとりに」表現させなければならぬ。

例えば、授業のまとめやふり返りの場面で、「南魚沼では、自然条件や地形条件を生かして米作りをしている。例えば、夏の気候が蒸し暑く、昼と夜の気温差が大きいことや、盆地を囲む山からの雪解け水を利用していることなどだ」と書く。

下線部は、本時で捉えさせたい「社会的見方・考え方」である。例えばの後は、具体例となる。つまり、下線部は必ず全員が書けなければいけない内容であり、例えばの後の具体例は、子どもたちそれぞれによって違う内容となる。ここまで一人ひとりが書くことができる、または話すことができはじめて全員に共有化が図れたということになる。

◆学びの深まりを「実感」させる

共有化することで「学級のみならずと学ぶと、より学びが深くなる」と実感させることが大切である。実感させるためには「価値づけ」することが必要だ。

例えば、「今日は〇〇さんの発言のおかげで学習内容が深まりましたね」「〇〇さんの△△という考え方は、場所が変わっても応用できる考え方ですね」「今みんなでシェアしていた□□という意見は、今日のポイントですね」「今日の授業で新しい気づきをくれた人のうち、『ありがとう』と伝えたい人はだれですか？」などである。

このように教師が具体的に価値づけしていくことで、どこが授業の本質であるかも分かり、自分のためだけでなく、全員の学びのために発言していこうという気持ちにもなる。学びの深まりと共に、発言した子も聴いていた子も幸せになれるような共有化にしていきたいものである。

◆共有化できる「安心感」

そもそも、「共有したい！」「話し合いたい！」と思える雰囲気があれば「共有化」は成り立たない。キーワードは「安心感」。何を言っても大丈夫。何を言っても受け止めてもらえる。そういう感覚を一人ひとりに持たせることが大切である。

そのために、社会科ではできるだけ多くの子に「予想」させ、価値づける。授業の中で予想する場面を増やしていくことである。答えを探すのではない。「あ、こんなことでもいいんだ」と子どもが思えるぐらい、自由に発言させるとよい。子どもが「発言する」というハードルを下げたあげることだ。

また、「よく分からない人は立ちましよう」と言って立たせる方法もある。そして周りの子たちにヒントなどを言わせて、理解できたら座らせていく。まずは「分からない」と言って立つことができた子を大いに賞賛する。「分からない」ことを堂々と表現できる学級にしていくのである。「分からない」と言える場を作り、分からなくても誰かが助けてくれる、という「安心感」をしっかりと定着させるのである。「分からない」を当たり前にしていくのである。

たとえ分からなくても間違えても、助け合える、価値づけてもらえるという「安心感」が、まさに共有化させる上でのベースとなる。

【参考文献】

小貫悟・桂聖『授業のユニバーサルデザイン入門』東洋館出版社 2014年

村田辰明『社会科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社 2013年

宗實直樹（むねざね・なおき）

関西学院初等部教諭。日本授業UD学会関西支部会員。
子どもたちが主体的に考え、「つながり」を深められる授業をめざして、日々の実践に取り組んでいる。

（2016年7月執筆）